

行くにも一緒であったことを思い出す。

私は開拓団に送る配給係をしていたので、酒があまっていたことがしばしばだった。川端氏は事務所と同棟の独身寮に住んでいたから、夜、酒樽を車に積んで運搬してくれて、左指で杯を持つまねの上手な人だった。土曜日は係長以下集まって飲むことが一番の楽しみだったことを思い出す。

引揚げ後は金沢市の消防署に勤務し、同郷の女性と結婚し子供にも恵まれ、模範的家族をつくり課長をへて署長で退職されたたまじめな人格者である。妹さんも引揚げ後、地元の人と結婚し幸福な人生をおくっており、なにかと兄の所に来る兄思いの女性である。

川端氏は満拓会石川県支部の幹部を務め、満拓会には必ず出席する。満州を愛すよき友であり、良き満拓人でもある。現在は、良き奥様と二人で金沢市粟崎の自宅に二人きりの悠々自適の生活をしている。

(東京都引揚者団体連合会)

理事長 阿久津 英雄)

波瀾の時代を流されて

三重県 川本 隆

一 師範学校卒業まで

私の祖父は、いわゆる小糠一升米三合持って、一代で自作農となった人だった。天秤棒一本で四キロ南の上野の町で仕入れた酒を、山一つ越えた北の丸柱村へ持って行って売り、帰りに陶磁器を仕入れて町へ売り、その口銭で田畑・家屋敷を築きあげた。

祖父はやがて死に、祖母と働き盛りの両親、そして七人の子供で、子供もそれぞれ分担する仕事が決められていたが、子供を育てる両親の苦労は並大抵ではなかっただろう。

当時の義務教育は小学校六年までで、六年になると中学入試の準備教育が行われた。私も受けていたが、入試の前日には諸注意を聞いていつもより早く帰った。早速東の田んぼへ母の麦の中耕の手伝いに行った。ひ

と休みして母と目が合ったとき、「あした入学試験や」と言ってしまった。母は「そうやったんか。そんなら早よ帰って風呂でも沸かせや」と。

試験の翌々日に合格者の発表があったが、私は、どうせ駄目だろうと見には行かなかった。友人が、自分は不合格ながら、私の合格を知らせてくれた。夕方になると洋服屋や靴屋が注文を取りに来た。高等科から久居農林学校へ兄も入学し、その寄宿舎代と二人の学費を捻出しなければならぬ両親は、簡単に喜ぶわけにはいかなかっただろう。更に今後弟妹五人の中等学校進学が控えていた。

上野中学校に入学して二学期の初め、私は急性脳膜炎に侵され、回復はしたものの成績が下がり、父が呼び出されてやっと二年生に進級させてもらった。三年生からは得意な理科や数学の教科が増えたので成績は上り『學術の進歩顕著賞』をもらった。五年生になると将来の職業を考えねばならない。私は工業方面の専門学校に入りたかったが、父が役員をしていた三田信用購買販売組合が経営に失敗し、借財返済の負担のほ

か、妹二人の進学も控えていたので、私は就学年数が最短の一年で、授業料の免除、食費の補助の特典まである、三重県師範学校本科第二部に入学した。全寮制で、寄宿舎内には鬱散うつさんという売店があり、菓子・うどん・ぜんざいなどが売られていたが、寄宿舎の食事は家とは比べものにならないほどの御馳走で、量も十分だし、家族の日ごろの食事を考えると、間食などする気にはなれず、一度も行ったことはなかった。

二 小学校の教員生活

市販生活一年間の三学期ともなると、卒業や就職で寮生活も活気ついてきた。義務年限一カ年の就職は保証されているので、就職先の希望を書かされた。私の出身地の伊賀は教員希望者が多く、伊賀出身者の多くは志摩郡か度会郡、桑名郡などの僻地へ飛ばされるのが普通だった。私はしばらく親元を離れて、自分だけの生活がしてみたい気持ちはあったが、家の苦しい生活が思いやられ、近くの学校を第一希望にした。運良く通勤可能な阿山郡東柘植小学校に決まり、昭和六年四月、新調の黒サージの詰襟服に、セルのスプリング

オーバー、中折れ帽に身を固めて、汽車で新任学校へ挨拶に行った。満十八歳だった。

最初の年は四年生男子六十人の担任、翌年の四月一日から満五カ月間、短期現役兵として久居の三三連隊へ甲種合格で入隊し、八月三十一日には陸軍歩兵伍長に任官して除隊した。九月からは高等科一年女子四十人、翌三年目も高等科一年女子担任で、二十数人の少ない学級、学級経営にも少し慣れ、最も充実した楽しい一年間だった。

四年目の三学期早々校長から、「海外派遣教員の募集があるから希望者は申し出るように」との県からの通達を紹介してくれた。それは南洋と満州だった。不景気で海外熱の盛んな時代、変化を好み、新しい天地を望む若い心が海外行きを思い立たせた。暑いところより寒いところが好きな私は満州に決めた。父が日露戦争に満州で負傷し、金鶏勲章きんけいしゅんしょうをもらった話など聞いていたので、身近な感じがして不安は感じなかった。両親は、次男坊で財産も分けてやれず、小学校教員では独立できないだろうと「申し込んでみるか、どうせ

駄目だろうが」と言うことで、校長も快諾してくれ、関係書類をつけて申し込んだ。

忘れてしまったころ、南満州鉄道株式会社から「採用に決定したから、承諾するなら至急県の出向辞令を送れ」との電報が入った。手続をすませると、「奉天平安小学校に採用決定、三月二十八日神戸港出港の船に乗るよう準備されたし」という電報に、国鉄と船の五割引券が送られてきた。二十五日が卒業式、二十七日には出発しなければならない。その年は六年生女子の担任で、進学する児童の最後を見届けてやることのできなかつたのを、誠に申し訳なく思っている。

三 奉天平安小学校

家族と水杯で別れを告げ、神戸港で見送りの兄と両手にテープを持ち、別れを惜しんだ。船は昭和十年三月三十一日に大連港に入港、満鉄本社へ案内されて今後の指示を受け、大連駅から夜行列車に乗り込んだ。翌朝目を覚ますと、窓外の景色の広漠さに驚いた。見渡す限りの赤土がどこまでも続き、駅も人家も見あたらない。奉天（今の瀋陽）駅に着いたのは翌早朝、昭

和十年二十二歳の時だった。

奉天駅には三重県師範学校出身の先輩の教頭と、満人のボーイに迎えられ、マーチョ(馬車)に乗せられて平安小学校へ向かった。当時内地は不景気で渡満者が多く住宅不足で、満鉄の用意してくれた合宿所に、新任三人が落ち着いたが、そこはカフェの五階の宴会場でも使われていたらしい、二十畳ばかりの大広間だった。カフェの隣のおでん屋に、無理に朝夕の食事と弁当まで頼み込み、合宿所の万年床に潜り込む生活が続いた。

その年の五月ごろになると、北支那や蒙古の風雲が怪しくなり、宿舎には鉄道関係の現場要員が同居させられ、夜中の出勤や帰宅が激しくて安眠できず、三人は学校の宿直室に移った。その後、下宿生活や寮での同居生活の末、ようやく学校近くの独身者の興亜寮が空いたのでそこに移り、一人で結婚までの五年間を、この一室に起居した。

平安小学校は一辺二百メートルの正方形の敷地に、二十四学級編成の理想的な校舎が建てられ、音楽・図

工・理科・裁縫・工作・体育などの特別教室のほか、図書室や保健室、校内放送の設備まで整い、内地では考えられないほど充実した設備で、児童の家庭環境もよく、素質も優秀で、保護者も教育ママが多く、週一回の参観日には教室に入らず、廊下に溢れるほどの盛況だった。学校側も毎週学年会を開き、速度や教材を研究して週案を作り、家庭への通信文も添えて毎土曜日に渡した。満州の学習院と言われ、もぐりの越境入学者の絶えないほどの優秀校で、昭和九年一月に開校され、鉄道自慢の学校だった。

私の新任は開校二年目の昭和十年度で、三年男女組担任、翌年には二年生男女組を担任したが、九月に満鉄教育研究所講習課の募集があり、十月一日から半年間、学校の北一キロほどにある研究所で児童心理学を専攻し、翌十二年四月に平安小学校に復帰、一年生を担当して研究を続けた。その後、在満日本教育会で、皇紀二千六百年記念論文募集があり、「在満学童特質研究並びに徳育実践一記録」と題して、先輩と協力して応募したところ、一等に入賞し、賞金百円をもらっ

て、十日間の内地学事視察旅行を命じられた。

そのころ、両親から呼び戻されて見合いもしたが、私はいずれ満州に骨を埋める覚悟だったので、こちらにいる人の方が良いだろうと、奉天に住む宮川芳子と結婚、仲人は平安小学校長に、親代わりを学年主任にお願ひし、奉天神社で十一月三日挙式、披露宴は中華料理店に全職員を招いて盛大に行った。ちょうど農繁期で、両親にきてもらえなかったのは返す返すも残念だった。新婚旅行は研究論文の賞金による出張を兼ねて、故郷に二泊、両親や親戚に、東京と前橋に立ち寄って妻の親戚にも報告し、新潟経由で奉天へ帰った。

四 北滿開拓村の彌榮^{イノカ}在滿国民学校

昭和十八年五月、ソ連国境に近い彌榮在滿国民学校の大室校長から「彌榮村現地出生児童の心理的特質研究のためきてくれないか」とのお誘いがあった。彌榮村は牡丹江と佳木斯の間で国境に近く、奉天から千キロもあって少々心配だったが、平安小学校では一番古く、いずれ辺地か開拓地の校長に出なければならぬようだし、大先輩のいる彌榮村で、好きな心理学を

研究させてもらえるのは有り難い。奉天も次第に食料事情が苦しくなっていたし、農村育ちの私にとっては、自給自足もできるのではないかと承諾した。

彌榮村は第一次武装移民団として、東北六県に群馬・茨城・栃木・新潟・長野を加え、十一県の在郷軍人から選ばれた五百人が、昭和七年十月に佳木斯に上陸、翌八年二月に現地へ入植して、匪賊と戦いながら開拓を進めてきた。治安もやや治まり、開拓も緒についた昭和九年から十年にかけて、写真一枚の見合いで内地から花嫁を迎え、現地生まれの二世が、十七年から毎年五十人近く入学してきたので、これら現地出生児の心理的・身体的特質を調べ、現地に落ち着かせる子供の教育研究のためだった。彌榮村の開拓団は、在郷軍人の優秀な者より選ばれ、右手に兵器、左手で耕作と言う形で始まり、開拓初期には匪賊が出て、開拓民と戦うことがあった。それで、村へ赴任する教員にも小銃一挺と実弾六十発が渡されていた。

彌榮在滿国民学校は本校のほか、大体出身員別に分けられた分教場が六つもあり、遠いところは本校か

ら十キロも離れていた。私は本校の北三キロの最も近い茨城分教場で、本校の校長などと連絡をとりながら研究を進めることになった。分教場はこの四月に開校したばかりで、教員住宅もまだなく、本校の隣の独身の先生の二室に同居して、毎日往復六キロの道を歩いて通勤した。仮教員住宅は一カ月ぐらいで出来上がった。四畳ばかりの部屋が二室と、土間にはカマドと風呂があり、南北の部屋の仕切りは、カマドの煙で暖められる壁ペチカ、北側の寝室は、風呂を焚いた煙が床下を通るオンドルになっていた。窓は二重窓で、洋草ヤンクという長い草と粘土で作られた、三十センチばかりの壁で囲まれているのが普通だが、私の仮住宅は、前に隣の団員が倉庫に使っていたもので、十センチぐらいしかなかった。そこで、窓の下まで土で埋めて地下室のようにしてくださったが、寝ているときに吐く息は白く、窓の横に掛けておいた服が、壁に凍りついていたのには驚かされた。寒い部屋でも布団をかぶると、風呂の煙で床が暖められ、昼の疲れを癒すことができた。

本校から茨城分教場までの三キロの道は、丘陵地の

原野を切り開いた道で、六月から八月にかけては、スズラン・アヤメ・キスゲ・ユリなどの草花が一斉に咲き乱れ、蝶や蜜蜂が飛び交い、小鳥がさえずり、おとぎの国でも行くようで楽しかった。途中ではたまにしか人に会わないが、団員には「ご苦労さま」、満人なら「チーワアンラマ?（食事はすみましたか?）」と挨拶が交わされた。

最初の年の昭和十八年度は一、二年生十七人複式の担任で、校舎は土間と板の間合わせても六坪ばかりの仮校舎で、周りの荒壁には上に紙が貼られ、黒板と教卓、二人掛けの児童机のほかはオルガンもなく、楽器は私のハーモニカ一個だけだった。その年の暮れには団員の奉仕で本校舎が完成し、十九年の元旦には新校舎で新年式を行うことができた。

昭和二十年になると戦況は激しく、団員にも次々召集状がきて、父親が召集されて留守になった隣の家の農作業や、牛馬の牧草刈りなど手伝った。

五 ソ連軍の進入

分教場の生活は、電灯もなくラジオも聴けない。新

聞や手紙も週に一度本校に配達されるのを、用務員がまとめて持ってくるだけで、全く戦況にもうとく、自然を友に作物を作り、子供の教育に励む生活を続けるだけで、本部に勤める幹部の方から「日本はもう駄目ですよ」と聞かされても、大して不安にも感じないで、平和な生活を楽しんでいた。

昭和二十年八月九日ソ連が参戦するや、わずかしが残っていない村内の在郷軍人全員に、赤紙なしの電話一本で、根こそぎの召集令が下った。教職員は皆短期現役兵で、五カ月間軍隊に入営し、幹部としての教練を受け、除隊のときは伍長に任官して、銃後の子供の教育や、残された老幼婦女子の指揮に当たるはずだったが、致し方なく、遺言状を書き改め、遺髪と遺爪を妻に残し、銃に銃剣、実弾六十発を持って牡丹江の関東軍兵事部へ出頭した。すると「在郷軍人全員の召集は誤りで、教師・医師・獣医その他村の幹部は直ちに引き返して、老幼婦女子の世話に当たって欲しい」と。「折角覚悟して出てきたのだから、何かに使って欲しい」と嘆願したが聞き入れられず、私たち二十人余り

は、応召された大部分の団員を残して戻ることになった。

兵事部にいるところからソ連機の爆撃が始まり、牡丹江駅から北上する列車に乗り込んだが、列車はしばしば停車しては乗客を車外に避難させた。これ以上の北上は無理と、家族との再会は諦め、牡丹江へ引き返さざるを得なかった。駅に着いてみると、奥地からの避難民でホームはごった返しており、街は大火災になっていた。牡丹江女学校に寝所を求めてたどり着いたが、そこもいっばい、玄関のコンクリートの上で眠れぬ一夜を明かした。

翌朝駅に向かったが、ホームは一層避難民でごった返し、子連れの女手ではどうにもならないと、荷物の整理を始めた途端、黒山のように集まった中国人が荷物を奪い合う。ホームに置き去りにされた子供からは、衣類を剥ぎ取ろうとされて泣き叫ぶ子供、列車が入る度に、荷物を背負い、両手に子供の手をひいた母親が、倒れた人を踏み越えて我先にと殺到する。もはや統制はきかず、私たちは一人でも多くを列車に乗せようと

したが徒勞に終わり、見守っているよりかはなかつた。

夜中過ぎようやく、私たちも最終列車の無蓋貨物の隅に乗ることができ、平時の二倍以上の時間を雨に打たれながらハルピンに着いた。ハルピンの奥地からの避難民でごった返していたが、小学校の屋根の下に落ち着くことができた。早速武器を持っている我々に当局から、治安維持のため警備に当たるよう頼まれ、数人ずつに別れて各地を回り、家族の消息を尋ねることができ、どうやら彌榮村の家族は、村を捨てて貨物列車で綏化方面へ避難したという情報を得ることができた。

六 終 戦

昭和二十年八月十五日の昼前、学校の職員から「本日正午重大放送があるから、全員もれなく講堂に集まるように」との連絡があり、君が代斉唱の後、無条件降伏の放送があった。こうなれば一刻も早く家族に会いたい。どうせ生きては帰れないと思っていたので、負けたということはそう深刻には感じなかった。

やがて「綏化から佳木斯へ通じる鉄道沿線の警備に当たって欲しい」との要請があり、数人ずつ各駅に配置され、私は綏化から先の駅に割り当てられていた。

長い間かかって綏化駅に着き駅員に聞くと、彌榮村の避難民は近くの飛行場に避難しており、この列車は佳木斯の方へ行くが、戻りの列車の見込みは全くないので、奥の方へ配置された者が集まって相談の結果「申し訳ないがもうこれ以上自分たちの家族を見捨てるわけにはいかない」と衆議一決、列車を降りて飛行場へと急いだ。

飛行場へは歩いて三十分ぐらいで着いた。大小の格納庫は避難民であふれていた。

都会育ちの、か弱い私の妻が、一歳にもならない洋子と三歳九カ月の允子の二児を連れ、二つのリュックサックにおむつ・着替え・食料などを詰め込み、自宅から彌榮駅までの四キロと、綏化駅からここまでの四キロを、よくぞこられたものだ、不思議に思われた。その上、彌榮から乗った列車は、石炭を積んであった無蓋貨車で、雨に降られ、普通なら一昼夜のところを

四日四晩もかかり、衣服も体も真っ黒になって到着したとのことだった。

北緯四十七度、北海道の北端よりまだ北にあたるこの地では八月半ばの夜は内地の冬並の寒さだった。飛行場の隅々まであさって、木片や板で急造の床が作られ、ドラムカンでは釜やカマド・石油缶のバケツなどが作られた。食料は、飛行場に貯蔵されていた物の配給を受けたが、米が粟に、トウモロコシがコウリヤンにと格下げられ、離乳期の洋子の食べ物には全く困り果てた。持ち合わせの現金も底をつき、皆の体力も次第に衰え、過労と食糧不足、不潔、シラミの襲撃などが重なって、ハシカ・ジフテリアなどの伝染病が発生し、葉もなく、抵抗力の弱い幼児から次々に死んでゆき、飛行場の空き家には土まんじゅうの墓が並んだ。八月も末になるとソ連軍の進駐が始まり、武装解除が行われ、ソ連兵が巡視にきては女や目ぼしい品物をねだられた。九月の声を聞くと霜が降り、薄氷が張り、このままでは全員凍死するよりほかない。ソ連当局に、南の暖かい方へ送ってもらうようお願いした。

大陸最南端の大連までは千キロ、平時なら一昼夜もかからないが、十日間もの貨物列車での避難が始まった。しかも、私たちの与えられた貨車は、子供の頭ぐらいのぐり石が床一面に積みこまれたままで、天井までわずか五十センチ足らずの間に、立ち上がることも、満員で横たわることもできず、座ったままの生活が続いた。列車が駅に停車するたびに、現金・時計・革製品などを献上して次の駅までの運行が許可された。時には女性を提供してようやく許されたこともあった。

また、駅に入ると満州人が待ち構えていて、ピストルを持ったソ連兵を盾に、残り少ない荷物をかっぱらっていく。私たちも、リュックサック一個を奪われた。駅のない所に止まると便所と食事の支度で忙しい。コウリヤンの煮炊きは米の何倍もの時間がかかる。列車はいつ発車するか分からない。コウリヤンは満足に煮えたことはなく、生煮えのままかじって飢えを凌いだ。この間にも息を引き取る者が続出し、鉄橋にかかる窓から、川辺に止まると、急いで川に葬った。

十日間の地獄列車から降ろされた大連は、内地の仙

台ぐらいの緯度で、さわやかで暖かかった。私は背中にリュックサックを背負い、十日間何も口に入らず、衰え果てた洋子を抱きかかえ、今にも息が絶えるのではないかと見守りながら歩いた。妻も、弱り果てて歩きかねる允子の手を引きずるようにして、行く先も分からず、長い列の後について歩いた。彌榮村を出てから一カ月半、風呂にも入れず、頭髮も髭も伸び放題、汚れ切ったシラミの巣となった布切れをまとった彌榮村難民の行列が、一キロも続いた。敗戦の痛手を直接被っていない大連市民は、好奇とも同情ともつかぬ眼で私たちを出迎えてくれた。

大連実業学校に到着し、運動場ではばらく待っているうちに指示があり、講堂に入れてもらった。板の間ではあったが洋子を寝かせることができ、日本人の医者者が回ってきて、「気休めとは思うが」と注射を一本打ってくださったが、栄養失調の衰弱には勝てず、だんだん息がかすかになり、両眼から涙を流しながら満一年の罪もない幼い息が途絶えてしまった。あの涙は何を言いたかったのだろう。

運動場で待っているとき、私のリュックサックの名前を見て、三重県出身の達美知郎（じみち）さんが同真人だと知って、お粥やカミソリ・寝具など持ってきてくださった。また、お風呂にも入れてもらったり、その後もいろいろお世話になった。地獄に仏とはこのことかと、全くうれしかった。

七 ソ連占領下の生活

彌榮村の難民は、開拓地で住んでいたように出身県別に教室に入り、大連市民から送られた布団や毛布を敷いて、足を伸ばして休むことができた。ところが夜になると、ソ連兵が女狩りにくるというので、男たちは入口や要所要所に立って、大きな声で追い立てるよりはかはなかった。若い女は髪を切り、顔に墨を塗って男装したりして、難を逃れた。

本部が設けられ、外部との連絡や慰問品の分配、仕事の割り振りなど世話に当たってくれた。まず私は、大連駅前の清掃整備の仕事をさせてもらい、昼食にはパンをもらった。次には民家の防空壕の埋立てをして、屋には蒸し芋やおやつに菓子などをもらった。続いて

油脂工場の荷役の仕事で、製品・材料・機械類などは解体してトラックに積み込む作業だった。これらは全て戦利品として、ソ連本国へ運び去られた。妻も、前記の達さんの世話で大福餅を卸してもらい、子供を連れて行商にまわったが、子供に商品を食べられて商売にはならなかった。その後、妻は、売り食いの日本人から婦人物の着物を買ひ、ソ連将校マダムの洋服に仕立て直して店頭で売り歩き、いくらかの口銭を稼いだ。私も達さんのお世話で豆腐の行商を始め、石油缶二個に豆腐を入れて天秤棒で担ぎ、売り歩いた。かなりの重荷で坂の多い大連の街を歩くのはこたえたが、農家育ちで担い物にも慣れていたせいか、何とか続いた。時には帰り道でピストルを持ったソ連兵に、売上金をすっかり巻き上げられて、泣くに泣けない日もあった。そのうちソ連軍司令部のボイラーマンをやらないかと、本部の職業幹旋係をしていた元学校長からの話があり、前記の達さんに相談したところ、そのボイラーは達さんが設計したこと、低圧だから危険はないし、使い方や注意事項を詳しく教えてもらい、不備な

所を修理してもらって焚き始めた。兵隊は喜んで、ボイラー室へ寝台を運んできては「ハラショー！（よろしい！）」と、煙草をくれるやら握手をせまるやらの大喜び。勤務は二人一昼夜交代、勤務日の食事は兵隊と同じ。勤務のない日は豆腐の行商を続けた。司令部前の元警察官官舎は、すでに捕らえられて空き家になっていたので、司令部に勤める掃除婦など十人余りを入れてもらい、畳の上で寝起きさせてもらった。

新しい年を迎え、暖かくなると首になるのではないかと心配していたが、雑役夫として残ることになり、物資係の二十歳にもならない兵隊の指示に従い、食パンや百キロもある砂糖袋などがトラックで入荷すると、兵隊に混じって半地下室の食料倉庫に運び込む。時には大きな黒パンを一本、「ダワイ」と、くれる兵隊もいた。そのパン一本で三人一日分の食糧に十分だった。ソ連の将校たちが家族を迎えて、元日本人の高級住宅に住んでいたが、水洗便所が水浸しになったり、電灯が付かない、トースターが壊れたなどと、私が呼ばれて修理に当たらせられた。修理はどれも簡単だった

が、ソ連では専門外の知識にはうとく、将校でもこんなことでも分らないらしい。修理が終わると将校のマダムから、白パンや砂糖、菓子など、なかなか手に入らない物をもらい、持って帰ると允子が大喜び。私の主な仕事は係の兵隊の管理している物品倉庫の清掃や整理などだった。このころになると、現金の支給はなく、現物支給と、兵隊からもらうなどの雑多な副収入で、結構三人の命をつなぐことができた。

八 帰 国

日本人の内地送還が街に流れてからも、なかなか実現しなかった。昭和二十一年、二年目の冬も近づくころ、彌榮村の本部から、私たち外泊している者へ、実業学校の本部に戻るように、と連絡があった。そして、私も司令部の勤めをやめて元の教室に戻り、自分で持てない荷物は現金に、限度以上の現金は持ち帰りやすい品物に換えた。

数日後、大連埠頭へ移されたが、船はなかなかこない。その間の食事は一日二食で、一度にさつまいもの粉で作ったカンコロ餅二個ずつの配給だった。とても

足りないのので、それぞれ工夫をこらし、食糧補給に努めた。

迎えの船が着いて乗り込むときの荷物検査は、案外無事にすみ、懐かしの故国へ向かった。船の食事は麦ばかりの御飯だったが、うまかったことは忘れられない。船中で亡くなった人もあり、海へ飛び込んで自殺した婦人もあり、悲しい汽笛の音に黙禱を捧げて送った。

引揚船は佐世保に入港し、米兵の監視下で、DDTを頭から背中まで真っ白に散布され、バラック建ての引揚寮に入った。最初の食事は白米に日本酒が添えられ、母国の有り難さが身に染みだ。寮に数日滞在し、郷里の状況を調べ、落ち着き場所の申告、外食券、引揚証明書などの受領、軍服や下着の配給を受け、特別列車でそれぞれの地へ向かった。郷里の三重県伊賀上野駅では、もう会えないと思っていた家族に迎えられ、生家に落ち着いた。村も田畑も昔と変わらず平和な農村だった。家族が作った白米の御飯をたらふくいただき、衰弱した体力も次第に回復することができた。

九 妻の闘病

こうして生き残って故国へたどり着いた三人は、健康を回復し、私は近くの上野小学校に復職、妻は百姓の手伝いなどしていたが、三女の出産、引揚げ時の労苦や栄養失調、慣れない農家の手伝いなどのためか、体調が悪くなり、病院で肺結核と診断され、早速入院して気胸を続けた。ちょうど前後して母と兄も入院、一時は三人の炊事の手伝いに追われ、そのころ農繁休業で欠勤にはならなかったが、田植えのころで、私は牛を使ってしろかきや苗運びなどしながらの病院通い。よくぞ続いたものと、思い出される。

両親や兄の元に身を寄せていると、引揚者としての援助がなくなり、入院医療費も全て自弁でしなければならぬし、そのころはまだ田舎では、結核は伝染病として恐れられ、幼い家族への伝染も恐れて、妻が退院してから別居を考え、二十三年一月、職員住宅もあり、新しい魚も食べられ、空気もきれいな志摩郡の離島、桃取村に転勤させてもらったが、住宅はまだ完備されず、急造の粗壁もまだ乾かない三畳一間の仮り

住まい、その上気胸を止めたためか、その八月咯血、三度目の入院、今度は給食もあり、完全看護の一志郡大三村^{せちむら}の結核専門の療養所に入院、気胸のいらぬいブロンベを充填し、退院後はしばらく離島の漁村生活を楽しんだのも束の間、充填した部分が化膿して二十六年三月、再び大三の療養所でブロンベを摘出、整形手術で右肺をつぶし、片肺はないものに等しくなった。私も療養所の近くへ転勤、妻も翌年の四月退院、急造の狭い住宅ながらも、親元へ預けていた三女を迎え、親子四人の生活に戻った。

一年後、亀山の妹の狭い古家を譲ってもらい、一応自分の家に落ち着いたが、子供らが成長して家が狭くなり、ちょうど隣の方が津市一身田の家を売りたいとの話で、妻の三重大学付属病院通いにも近いし、娘ら二人とも津市の学校に通っているから、退職金を前借りして買い求め、昭和四十年八月から親子四人、ゆったりした、家らしい現在の家に住むことができた。敗戦後満二十年間、家らしくもない仮り住まいを渡り歩いたことになる。

平成二年には二人の結婚後五十年の金婚を迎え、各種の仲間や親族親戚の方々から祝福してもらい、妻はこれを引け時と満足したのか、風邪がもとでいよいよ全身が衰弱し、一カ月半の入院後自宅へ戻り、三年九月に永眠した。娘二人とも他家へ嫁ぎ、今は広い家に男一人残され、愛用のワープロと複写機で自叙伝を作ったり、仲間の印刷のお手伝いなどさせてもらって、老後を楽しんでいる。

引揚げ後は妻の病氣療養のため、病院と住居を求め、県内を南から北へ五つの住所と、十二の学校を渡り歩き、地に着いた満足な教育もできず、誠に申し訳なく思っている。

短歌で生きざまを回顧（旧仮名遣い）

○北満の開拓草屋のランプの下二人で聴いた『田園の曲』

○親子馬御して耕す北満の黒土輝く赤き夕日に

○教卓に隠れて吾子は南瓜食み妻は教えをり拓土の児らを

○紙芝居道具背負ひてコーリヤンの畑の間駆け行

く児ら待つ屯舎に

○ランプの灯に児らの作文読みをれば遠く吠える狼の声

○草と土で造った家に妻子置き召されて征つた八月が来る

○名も知らぬ異国の河に葬りし教え子の頭つ平和の鐘に

○母乳洩れ浴衣にくるまり五十年洋子は眠る満州の土

○入院の妻をし訪ねリンドウの花咲く山路ひとり帰り来

○人居らぬ家に帰れば暗闇の中より匂ふ妻の髪の毛

○長き年病みてをれども慰むる君あればこそ生きんとぞ誓ふ（入院中妻詠む）

○君いとし遠く隔てば君いとし眠つむればほほ笑める君（同前）

○生活に疲れ果てたる夫の眼に寄する浪さえ挑むが如し（同前）

○右肺はなきに等しき体にてわれの一生は過ぎゆくならむ（同前）

○退院の妻迎ふるに雨漏りを洗面器に聞きひと夜眠れず

○ランプ作り竈を築き壁を塗り生き存へり引揚者われ

○引揚げの思い出綴り世にし問ふ核への不安奪るこのごろ

○引き揚げて病みるる妻の背を拭けば初めて言ひぬ「ぢいちゃん好き」と

○金婚の祝いに賜びし対のカップ逝きし妻来よ
コーヒー飲まむ

○闇の夜を露天の風呂に身を沈めせせらぎを聞く
あしたはあした

【執筆者の横顔】

川本先生の実家は伊賀上野の近郊の農家である。旧制中学校受験の前日まで、家業を手伝ったほどで、進学後も働きながら勉強したという。それでも成績優秀

で、家庭の事情で学費免除の三重師範に進学され、教師の道を選んだ。多くの志願者の中から満鉄の小学校教諭に採用され、教育心理学を専攻された。

昭和十八年四月、開拓地出生児童の研究のため、第一次開拓団弥栄村の茨城分校に勤務された。当時の開拓地の新設分校は教材をはじめ、すべて不自由な時代であった。

先生の教育の情熱、誠実なご人格は、この地域（茨城・栃木・群馬）の方々から尊敬され、部落に行事があると、まず川本先生を招待するのが常であった。先生は就学前の子供たちのため人形芝居をされたり、地域の人々と親睦し融和を心掛けた。

戦雲急を告げ、教師不足となり、奥様も二人の幼いお子様を養育しながら教壇に立たれた。そして先生も応召された。

八月九日、ソ連軍侵攻。弥栄の村民全員が艱苦の逃避行を続け、やっと大連に辿り着いたが、間もなく次女の洋子さんが栄養失調にて亡くなられた。

大連での一年余りの苦難の難民生活でも、先生の逞

しい行動、生活力があつた。やっと懐かしい故郷に帰つても、多くの苦勞があつた。奥様はあまりの過勞がもとで、肺結核を発病され、しかも度々の再発を繰り返したのである。先生は家族を愛し、教育にも専心努力され、その逞しい情熱と優しさには、ただただ感動を人々に与えた。

昭和五十四年、弥栄総会が栃木支部にて開催されたとき、ご夫婦で出席くださった。

村の方々に、殊に教え子や地区の方々に囲まれた先生夫妻は、感無量の様子だった。その後も遠方の支部会にもご出席の榮を賜っている。

先生はあらゆる困難に直面しても、常に誠実に最善の努力をされる方であり、弥栄村にて直接ご薫陶を戴かなかつた我々二世でも、人生の師として尊敬している。

先生は定年後にワープロ、製本、短歌等々に多趣味であり、その地域の方々に多大の貢献をされている。

(弥栄会会長 藤巻 禧四郎)

運命とあきらめて生きてきた私

福島県 山崎 照子

私の祖先は、紀州の殿様にお仕えした家柄だったが、明治維新で武家制度は廃止となり、明治六年生まれの父は、苦勞して船の機関長の免許を取得して、私たち一家は、和歌山県の田辺より門司に移り住みました。父は、大日本製糖会社に、四十年近く勤めていました。思い出としては、春夏秋冬の楽しい社員家族の行事があり、大正八年生まれの私ですが、当時は幸福な子供時代を過ごしました。四歳で生みの母を亡くしましたが、そのお葬式でたくさんの人がきてくださるので、喜んでいたのが、人々の涙をさそつたとのことでした。

父は、昭和十二年、私が女学校を卒業した年に亡くなりましたが、両親の庇護のもと、楽しい少女時代・学生生活・悔いのない青春時代を、出船入船でにぎわ